

# Art Insight Kagawa

「『かぐや姫』は三世代で鑑賞し、また三世代が出演できる作品」と話す平井秀明=アリアあなぶきホール



【ひらい・ひであき 国内の主要なオペラを指揮する一方、オペラも多く手掛ける。自作の「かぐや姫」は、小町百年の恋」も各地で振る。11月にチェコ・ウィルトゥオオジー室内管弦楽団の首席客演指揮者に就任した。祖父は作曲家の平井康三郎。

## 「かぐや姫」の平井秀明に聞く

注目の若手指揮者で、「かがわシニア・ニユーアイルハーモニック・オーケストラ」の指揮にも携わる平井秀明。彼が作曲・台本を手掛け、自ら指揮するオペラ「かぐや姫」が今月末、高松で上演される。練習に来原していた平井がインタビューに応じ、作品制作の背景や曲の魅力などを語った。その答えの中には、香川でのステージにかける特別な思い入れもにじんでいた。

「初演から約8年。「かぐや姫」は国内外の主要都市で取り上げられている。

「光栄なこと。音楽の基本は、聴いた人が後でメロディーを口ずかめることだと思っている。この作品はメロディーがすっと耳に入る。また日本の物語でありながら、「地球と宇宙との交流」というヨーロッパ的なロマンも持つ。だから海外でも親しまれるのでは。

「そもそもこの作品を書くことになったきっかけは。

ニューヨークに留学していた1992年に、かぐや姫が月に帰らなくてはならない定めを翁と姫に告げるアリアをつづらせた。ワシントンで黒人の新鋭グループがそれを歌ったところ、地元紙の一面で紹介され、オペラ化のリクエストが寄せられた。2000年ごろから1年ほどで完成させた。

「音楽的な特徴は。

「日本的な音階を取り入れ

つつ、イタリアやドイツのロマン派のテイストに仕上げた。それと何より「日本語で歌うオペラ」という点を重視した。西洋の作品を日本語の訳詞で歌うことがよくあるが、これだと音楽の美観に無理がある。「かぐや姫」は自分で台本を書いたので、日本語のよさを生かしたオペラにできた。

「自分で指揮することにも意味があるだろう。

「作曲家が楽譜に表現できることには限りがある。だから指揮者、演奏者によって解釈が異なり、同じ曲でもまったく違う音楽に再生される。書いた本人が指揮すれば、一音一音に込めた思いを正確に伝えられる。

「三世代で楽しめることをポイントにしている。

「子どもたちはおどろき話として、親は平安貴族のロマンスを味わい、祖父母は人生の教訓を再認識し、和歌の探求もできる。加えてそ

## 3世代、家族の絆を深めるオペラ/今年の最後、夢のあるSF音楽

公演は芸術の輪を広げ、地域文化の活性化を図ることを主眼。28日に高松市玉藻町のアリアあなぶきホール小ホールで開く。開演は午後6時。入場料は一般2000円ほか。問い合わせは同ホール、電話087(823)5023。

「この鑑賞面だけでなく、三世代が一緒に出演することもできる。核家族化が進む中、家族みんながステージをつくり、絆を深めることにもつながるオペラだ。

「ゆかりの深い香川での上演をどう感じているか。

「シニアオーケストラは、四国二期会や高松交響楽団も振らせてもらっている。今度の公演はいろんな分野の方とのつながりの上に成り立つ。さらに今回、2幕に新しい音楽を書き加えたので、その初演にもなる。

「香川は竹取伝説発祥地の有力候補で、しかも優れた音楽王国。そんな特色を知ってもらえる舞台にしたい。

「香川の2010年を締めくくる一夜になる。

「出演者もスタッフの方もとても熱心に準備をしている。今年も暗いニュースが相次ぐ一年だったが、最後は家族そろってホールに足を運んでいただき、夢のあるSF音楽に、みんなが浸っていただければと思う。

パートカッションの小松玲子とサクソホンの巨匠、奈緒美が共演するコンサート「ブルークリスマスナイト」が21日、高松市浜町の北浜ザインラトリイホールで開かれる。夜の海を望むムード溢る空間でのライブで、

## アリア



小松玲子



県内を拠点にする若手女性ホルン奏者6人が、アンサンブルを結成し、18日に高松市内で初のコンサートを開く。親しみやすいクラシック曲にロマンチックなクリスマスソングなどを交えたプログラム。きらめく師走の夜、曇るバックに、表情豊かな優しい音の重なり合いに浸ることが出来る。

6人は20、30代前半のプレイヤーで、ともに高松市の清水香織の生徒。それぞれ別の大学などで学び、現在は高松交響楽団や高松インディペン

## 県内の



山田理子